

町づくりの思い



水田 丞

手掛けたい、といった風である。学生たちは卒業後、広島を離れ、東京や大阪の企業に就職する者も多い。日々新築物件の仕事をこなしているはずであろう彼らや彼女らが、十年、二十年前に取り組んだ卒業論文、卒業設計のことをどのように感じているか、ぜひとも聞いてみたいのだが、未だに果たせないでいる。

大学教員という職を得てかれこれ十年を過ぎた。筆者が勤務する大学では、学生たちは4年生になると、卒業論文や卒業設計といって、自分たちで課題を発見し、自分なりの解決を論文や設計提案としてまとめるということを必修で行っている。最近、自分の郷里の建築や町並を対象に、研究や設計課題に取り組みたいという学生に頻繁に接するようになった気がする。例えば、戦前の広島の町並について調べたい、郷里に残る町家について調べたい、あるいは、郷里の町の町づくりを

地方創成という言葉があちこちで大きく掲げられている。今後、状況は変化するかもしれないが、観光立国の推進は重要な政策の一つらしく、インバウンドという言葉も最近までよく耳にした。以前に比べると、歴史的な屋敷を飲食店や店舗に再生した事例も明らかに多くなった。空き家を活用して地域おこしにつなげようとする試みも以前にはなかったことである。

つい先日、広島県内のある地方都市に出掛けた。近年、瀬戸内海の美しい景色や寺社の

ある坂道、郷愁さも感じさせる町並を求めて全国から観光客が訪れている。町の中心部にアーケード街があり、最近オープンしたであろう空き店舗を活用したショップやカフェが目を引き、観光客でにぎわっていた。一方で、シャツターが下りたままという商店もかなりの数があった。古くからの店だろう。アーケード街の核店舗だったスーパーは閉店し、空地になっていた。地方小都市にあるシャツター商店街の中に観光客向けの洒落たショップやカフェが点在するという状況である。筆者もその日は酷暑だったこともあり、ペットボトルのお茶を求めて少し彷徨ったのだが、あるのは観光客向けのドリンクで（少し値段が高い・・・）、商店街の外れでようやくコンビニエンスストアにありついた次第である。

そこに住んでいる人、そこを訪れる人、両方にとって魅力的で快適な町にしていくには

どうしたらよいか、学生たちと、そして社会へと巣立っていった教え子たちと取り組むことができればと考えている。

（広島大学准教授）

